

1 研究主題について

安芸太田町は、人口約 5,700 人。町内には、保育所・こども園4園、小学校3、中学校2、公立高校1がある。その内、安芸太田中学校区の3校がへき地学校である。

学校名	児童・生徒数	学級数
安芸太田中	47	5
筒賀小	52	7
戸河内小	60	6

安芸太田中学校区の児童生徒数は年々減少傾向にあり、1クラス数人から十数人編成の学級で、へき地小規模校ならではの、人間関係が固定化されやすい環境にある。また、外的な刺激が少なく、児童生徒同士で切磋琢磨しにくいという課題もある。教職員にとっても、学年1人、教科担当1人という状況もあり、授業力向上に向けての「横の連携・相談」が十分に行えているとはいえない。

そこで、これらの課題を克服すべく、研究主題を「学校間をつなぎ、主体的・協調的な学びを育む授業の創造」、副題を「知り合い、ふれ合い、学び合う環境づくり」と設定した。開かれた教育環境の中で、新学習指導要領の求める、変化の激しい新しい時代を主体的に切り拓く、心豊かでたくましく生きる力をもった児童生徒の育成を目指す。



子供達の知り合い、ふれ合い、学び合う環境づくり



教職員どうしの知り合い、ふれ合い、学び合う環境づくり

2 実践

(1) 協調学習

① 協調学習とは

安芸太田町では、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指し、平成 22 年度から「新しい学びプロジェクト」に参加し、CoREF(一般社団法人教育環境デザイン研究所 CoREF プロジェクト推進部門 <https://ni-coref.or.jp/>)、全国の教育委員会及び学校等と連携し、一人一人の子供達が自分で考え、考えや視点の違う他者との関わりを通じて自分の理解を見直し深めていく学び(=協調学習)を教室で実現するための授業づくりを展開してきた。

② 協調学習の実際

へき地小規模校における課題に加え、新型コロナウイルスの感染拡大により、一人一台端末を利用した授業改善も急務となっている。そのような課題を踏まえ、より効果的に授業改善を進めるため、協調学習の実践に向けた授業づくりを次のように進めている。

〈知識構成型ジグソー法〉を用いた協調学習

本町での授業研究の柱は、「知識構成型ジグソー法」を取り入れた協調学習である。

この手法を用いることで、自分で考え、対話を通じて理解を深める協調学習を引き起こしやすくなる。また、同じ手法に取り組んでいるため、校種・学校・教科を超えて、児童生徒の学びの事実を基に協議することができる。

〈仮説検証型の模擬授業の実践〉

授業づくりにあたっては、まず、模擬授業を通して、児童生徒の考えを想定し、授業のシミュレー



仮説検証型模擬授業

ションを行っている。また、授業後には、児童生徒の発話や学びの姿と事前の想定を比較検証し、授業デザインの改善案を教職員の中で話し合っている。

仮説検証型の授業研究に取り組むメリットは2つ挙げられる。

まず、参加者全員で授業者の仮説を共有することにより、児童生徒の学びの姿を想定しながら授業を参観することができ、学びの事実をより見とりやすくなることである。

次に、協議の視点が明確になることである。見とった児童生徒の学びの姿を根拠にするため、教師のふるまいの良し悪しではなく、授業デザイン全体の課題や改善策について具体的に交流することができる。

〈メーリングリストと学譜システムの活用〉

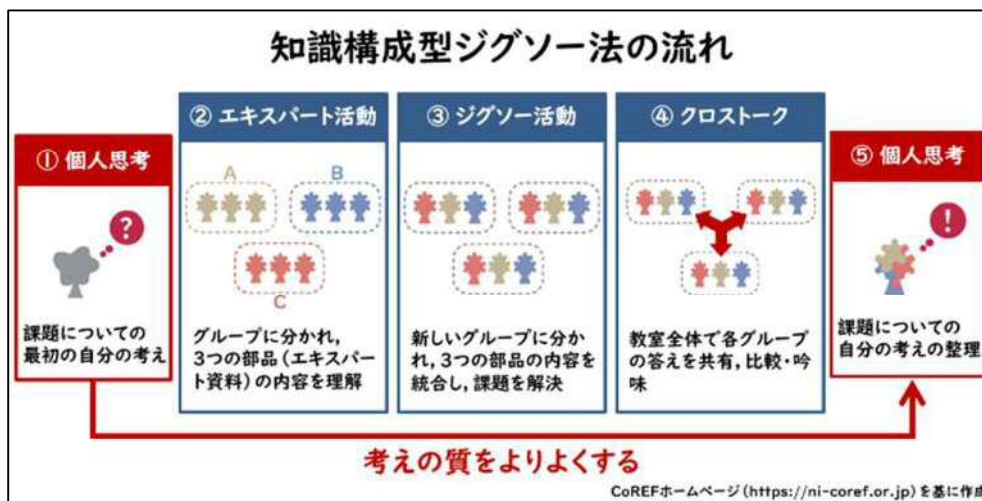
メーリングリストとは、「新しい学びプロジェクト」に参加する全国の教員とメールで教材についての意見交流ができるシステムである。メールでのやりとりを通して多くの教員から意見をもらい、教材研究を深めることができる。

学譜システムとは、メーリングリストへの投稿内容がクラウド上に蓄積され、過去の開発教材や授業後の振り返りを閲覧・検索できるプログラムである。メーリングリスト上でのやりとりなど、過去の教材づくりのプロセス、実践の振り返りを他の自治体の教員と共有し、次の授業実践に活用することで、過去の蓄積を生かした授業改善のサイクルを回している。

このように、「知識構成型ジグソー法」を取り入れた協調学習を軸として、校内のネットワークと校種・学校・教科の枠を超えたネットワークを活用しながら授業改善に取り組み、授業力の向上に努めている。



小学校「Tブロック」で行う協調学習



新しい学びプロジェクト(戸河内小学校でT授業)事後協議



(2) 学校間をつなぐ取組

① 保小連携

認定こども園・保育所と小学校で「育ちと学びをつなぐ」連携を大切にし、安芸太田町の重点施策の1つである保小連携を行っている。園児・児童にどんな力を育成したいか、そのためにはどんな活動や工夫をするべきか、年長児・小1担任同士で話し合いを重ね、1年間をかけてアプローチカリキュラム及びスタートカリキュラムの加筆・修正を繰り返しながら、子供達の実態に合った合同の活動を計画・実施している。このようにかけはし期（義務教育開始前後の5歳児から小学校1年生の2年間）の育ちと学びの質を高める保育・教育に取り組んでいる。



1年を通した保・小アプローチ・スタートカリキュラム

② 小小連携

安芸太田中学校区「筒賀小学校」「戸河内小学校」（以下「Tブロック」という。）の2小学校は、いずれも小規模・少人数の学校である。そのため、Tブロックではこれまで、各校での指導方法の工夫改善だけでなく、「知識構成型ジグソー法」による協調学習などを合同で行い、お互いを知りあい、ふれ合い、学び合う場を作ってきた。これらのTブロックにおける合同学習（以下「T授業」という。）で、児童が普段とは異なる同級生、指導者と共に意見の交流やチーム対抗の運動など、少人数では行うことのできない学習活動を経験することは、多様な見方や考え方に出会うことのできる絶好の機会である。



多様な学びの場を「T授業」で

コロナ禍においても、Tブロックの2校をオンラインで繋ぎ「知識構成型ジグソー法」を行うことでこれらの取組を継続し、T授業研究公開（文科省指定の「新時代における先端技術導入の実証事業」）を実施する等、成果を上げている。



Tブロックのオンライン協調学習

③ 遠隔授業

安芸太田町では、平成30年度から児童生徒用のタブレット型端末及び校内のWi-Fi環境を整備し、他校の児童生徒との遠隔授業を推進してきた。なかでも中学校英語科はその先駆けとなり、これまで県内外を問わず実践を繰り返してきた。安芸太田町の観光名所の長所や課題を他市町の中学生に説明する英作文を構成し、互いの地域について英語で交流した。また、英語圏の高等学校とも遠隔授業を実施しており、令和3年度からは、オーストラリア・クイーンズランド州のヤブーン高校との遠隔授業を継続して実施している。



英語科「他校との遠隔授業」

(3) 地域の特徴を生かした取組

へき地・小規模校にとって、地域と連携して特色ある教育の推進を図ることは、広く開かれた教育環境を構築し、確かな学びを創ることにつながると考える。

そこで、安芸太田中学校区の各小・中学校では、次のような地域との連携を生かした教育活動に

力を入れてきた。

筒賀小学校では総合的な学習の時間で、安芸太田町の特産品である「チョコちゃん」や「つけもの焼きそば」などについて、調べたことやインタビューをもとにガイドブックを作成した。コロナ禍の影響で、販売店で商品に触れることはできなかったが、各商品のCMを作成し、学習発表会で発表した。保護者が地元の特産品に関心を持ったことで、実際にそれらの商品を食べてみたという児童がいた。普段は気付きにくい地域の特色に目を向け、その良さに気付くことができた取組となった。



「チョコちゃん」をPRするCM発表

戸河内小学校では大豆作りと並行して本町の特産品である「祇園坊柿」について調べ、地域の方の協力のもと柿の加工体験ができた。学習発表会では子供たちから、「工夫された加工食品の一つとして祇園坊柿のことも発表したい」と声があがった。地域の協力で叶った「自分達の目で見てふれて学ぶ体験」は、価値のある学びとして子供達の心に残り、保護者や地域の方に伝えることができた。



地元生産者の方へのヒアリング

安芸太田中学校では、観光名所の清掃ボランティア活動、地元で働く方を講師として招き、キャリ

ア教育やマナー講習、防災学習などを行った。

また、音楽科、美術科、家庭科、総合的な学習の時間で、各教科の特性を生かした教科横断的な指導により、地元のお土産「チョコちゃん」のCMを作ることができた。



「チョコちゃん」生産者へのヒアリング



「チョコちゃん」CMづくり(音楽科・総合的な学習の時間)

さらに、令和2年度には、安芸太田町社会福祉協議会から「高齢者が靴の脱ぎ履きに使うベンチ」のデザインを依頼され、美術科のデザイン分野で生徒が設計した。安芸太田中学校支援協議会の募金活動で得た資金を元に、設計図を太田川森林組合を通じ地元の工芸店に依頼し、広島県産の木材で制作されたベンチが筒賀福祉センターへ納品された。



福祉センターのベンチ設計(美術科)

このように、地域との連携から教育効果が高まり、「知り合い、ふれ合い、学び合う」教育環境づくりを、9年間の学びの中でつくりあげてきている。

3 成果と今後に向けて

(1) 協調学習

令和3年度末に安芸太田中学校の全校生徒を対象に実施したアンケート調査では、下表の①、②の項目に対して、肯定的に回答した割合がそれぞれ 97.5%、92.5%と高く、生徒自身も他者と協働的に学び合うことで自分の考えを深めることができていると実感していることが明らかになった。

アンケート結果		
①「友だちの考えを聞いたり自分の考えを伝えたりすることで、学習内容の理解が深まる」		
②「授業中の話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり広げたりすることができている」		
	あてはまる	あてはまらない
①	97.5%	2.5%
②	92.5%	7.5%

また、令和3年度卒業生に行った協調学習の取組についてのアンケート結果を次に示す。

9年間、協調学習を行っていかがでしたか？	
とてもよかった 55.6%	よかった 44.4%
肯定的回答率 100%	
9年間、協調学習を行ってよかったことを教えてください。	
<ul style="list-style-type: none"> 他の人の考えも協調学習を通して知ることができた。 友達と一緒に考え、意見を共有できたことで、いろいろな人の考え方を知ることができた。 他人の考え方を知り、自分の考えを深めることができた。 他の人の意見を聞いたり、一緒に考えたりすることで知識や理解を深めることができた。 	

これまで取り組んできた授業研究のシステム、町内外の人とのつながりのベースに ICT による支援が機能することで、教職員が協調学習を通して児童生徒の学びの事実から学んで、授業の質をより向上させていくことができたと考えている。

(2) 学校間をつなぐ取組

保小連携では、1年生は、年長児のお手本になれるように行動する姿、年長児に笑顔になってもら

えるように考え活動する姿が見られた。年長児は、小学校に憧れの気持ちを持ち、1年生や先生達と仲良くなりたいという思いを持って、安心して楽しむ姿が見られた。このように計画的、具体的な保小連携により、園所から小学校へスムーズにつながっていると考えられる。

小小連携では、多様な考えにふれながら学びを深めたり、新しい人間関係を構築したりすることができ、児童にとってよい機会となっている。普段の少人数学級ではない「新しい人間関係を構築する機会」「周りからの刺激」「学ぶ姿勢や意欲の自己認識」があり、仲間との絆を確かめ合うことができた。

(3) 地域の特色を生かした取組

小学校では、ふだんは当たり前と考え、気付きにくい地域の特色に焦点を当てることで、それぞれの地域の良さに気付き、それを伝えたいという意欲につなげ、学習を展開することができた。さらに、中学校では、地域貢献活動として、地域を活性化のために地域の方と共に活動することができた。このように、へき地小規模校ならではの地域の特色を生かして、児童生徒の発達段階に応じた活動を展開していくことで、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、実践を積み重ねることができたと考えられる。

(4) おわりに

安芸太田中学校区では、へき地小規模校における目指す学びや子供の姿について語り合い、地域の特色や ICT 技術を生かして大人同士がつながることで、子供同士がつながり、子供と地域がつながることができている。

今後も、「知り合い、ふれ合い、学び合う環境づくり」を通して、主体的・協調的な学びを育む授業の創造を推進すると共に、ふるさとに夢や誇りをもって、未来の創り手となる子供を育成していきたい。